

受付番号

留学・研究計画書

氏名 岩原 紘伊	留学機関名 国立 ウダヤナ大学
留学先国名 インドネシア共和国	留学期間 西暦 2010年3月～2012年2月
研究テーマ インドネシア・バリ島におけるヘリテージ・ツーリズムに関する人類学的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>遺産観光は、1980年代から UNESCO の世界遺産ブームにより急速に発展している観光形態である。申請者が文化遺産観光を研究する理由は二点ある。一点目は、文化遺産周辺に住む人々の日常生活空間は、観光の影響を受けるだけでなく制度により管理されていることである。文化遺産は長く物理的建造物を中心に保全・管理が行われてきたが、近年文化遺産を人との相互作用「文化的景観」という空間的視点で捉える方向へシフトしている。一方それは管理する行政側と周辺住民の間の軋轢を生じさせている。二点目は、観光の場で表象される文化遺産の「文化」は要素化され、人類学的に動的に捉える「文化」は静的なものとなされ扱われる傾向にあることである。以上から、申請者がヘリテージ・ツーリズム（遺産観光）研究が極めて重要であると考えるのは、文化遺産観光に関わる文化・社会的現象が、国家によって制度化されていたり文化政策と結び付いたりして政策と並行関係にあり、また人々の日常生活や自文化認識と大きく関わってくる点である。文化遺産と周辺地域の文化や社会の人類学的研究は、その多数が観光地であるゆえに観光研究から蓄積がある。その研究は、観光の社会的影響に注目し、観光を受け入れる側と観光客との関係性や相互作用から変容する文化の動態性を明らかにしてきた。一方多くの研究は観光の「グローバル」な影響に焦点を当てるものであり、地域的な「文化遺産」の意味付けや関係する政策、その地域の社会的・文化的背景に対する研究は不足している。本研究はその点に研究の焦点を当て人類学の視点から観光政策研究と文化研究に貢献する目的を持つ。</p> <p>インドネシアのバリ島は文化観光地として世界的に知られているが、スハルトの政権下の観光開発は外国資本の流入と中央政府の影響力を増大させたといわれる。「文化 (budaya)」は現代のバリ人のアイデンティティと深く関わってきたが、観光で表象される「文化」はインドネシア国家の文化に統合されようとしている。東南アジアでは 1980 年代から、文化遺産は国家の独自性を示す象徴として観光開発に利用されるようになり、1990 年代からインドネシアでも中央政府によってバリ島の棚田や寺院といった文化遺産を世界遺産に登録するための政策が展開している。一方でスハルト政権崩壊後の地方分権化によってバリ人の「バリ人である」という意識は一層高められ、文化的アイデンティティが政治化され、バリ社会は文化遺産の観光活用をめぐる新たな岐路に立っている。そして文化遺産はその新しい動きを捉えるカギとなっている。</p> <p>本研究はバリの遺産観光に関する研究というだけでなく、文化遺産の持つ社会的・文化的位置づけに焦点を当てることで、すでに述べた、管理する行政側と周辺住民の文化遺産をめぐる軋轢の解決や、また我が国の重要な国際貢献の一つである文化遺産に関する国際協力活動に対してもある方向性を与え、社会的な貢献となる研究になると考える。</p>	

成果報告書

記入日 2012 年 4 月 23 日

氏名 岩原 紘伊	留学先国名 インドネシア	所属機関 ウダヤナ大学文学部
研究テーマ：インドネシア・バリ島におけるコミュニティー・ツーリズムに関する人類学的研究		
留学期間：2010 年 4 月～2012 年 3 月		
【研究の目的】 <p>インドネシア・バリ島の観光地化は 1920 年代に始まり、大規模に観光地化が進展するのは、スハルト政権下の 1968 年の第二次五カ年計画からである。この過程において、観光地化とバリ文化の関係は、「バリ文化」がバリ人のアイデンティティーとされることから、外国人研究者のみならず、バリ人知識人階級の間でも長く関心が寄せられ、kebalian（バリ人になる）、Ajeg Bali（バリの保持）などと議論されてきた問題系である。</p> <p>本研究の目的は、慣習村という地域共同体を対象としたコミュニティー・ツーリズムのプロジェクトをレンズとして、コミュニティー・ツーリズムに関与する諸アクターの志向性と活動実践を検討することにより、バリ人アイデンティティーの現在とコミュニティーをめぐるバリ内部の問題群を明らかにするところにある。バリ島には、オランダ植民地時代に設置された「行政村」と儀礼をめぐる慣習をもとに纏っている「慣習村」という二つの村形態が存在する。慣習村は、現代の文脈において、地域的特性を維持する機構であり、変容する今日のバリ社会において地域的繋がりや地域レベルの文化を維持するための牙城であると行政やメディア、NGO など様々なアクターから位置付けられるものである。そして、環境問題や地域・個人レベルの生活格差の拡大を端として広がりつつある「観光を受け入れるバリ島の限界」という認識と NGO などの団体活動の緩和を背景にして、本研究で焦点を当てる、これまでの観光形態とは異なる慣習村を対象とした「コミュニティー・ツーリズム」の導入が注目を集めるようになっている。</p> <p>当初、本研究の研究題目を 1990 年代に始まるバリ島の世界文化遺産への申請問題をめぐる問題を扱うことから「ヘリテージ・ツーリズム」としていた。ヘリテージ・ツーリズムとは、エコ・ツーリズムが環境保全を志向するように、ある文化の持続性を志向する観光形態である。現在、バリ島ではその文化の持続という問題への議論は、村落システムの保全というアリーナへ移っている。この理由から、研究を進めて行くうちに、この文化の「持続可能性」を問うならば、人々の文化の持続性に対する言説と実践がより可視的な現象として立ち現れているコミュニティー・ツーリズムはこれまでの「ヘリテージ・ツーリズム」の延長線上にあり、研究テーマをコミュニティー・ツーリズムとすることが適切であると考えた。また、この方法を取り、コミュニティー・ツーリズムに注目することでバリ島文化の持続と観光の問題を歴史的かつ同時的に扱うことが可能になる。</p>		
【研究の内容・方法】		
・ 研究方法		
本研究では、インドネシア・科学学術院の調査許可のもとバリ島にあるウダヤナ大学に客員研究員として所属し参与観察を基礎としたフィールドワークと文献収集を行った。最初の 6 カ月間は、インドネシア語の習得と適切なインフォーマントとのコンタクト、文献収集、大学主催の学術セミナーへの参加等の基礎研究にあてた。残りの 18 カ月は、バリ島南部の観光地化が最も進んだ一方で、都市部と農村部の地域格差が深刻化しているバ		

ドゥン県を中心にフィールドワークを行った。具体的には、コミュニティー・ツーリズムに関係する諸アクターを3つの層に分け、フィールドワークを行った。①バドゥン県の行政側に対して、行政が行うプロジェクトに対する視察への同行、文書等の資料の収集、観光局や文化局などの担当者へのインタビューを行った（マクロレベル）。②コミュニティー・ツーリズム推進プロジェクトを行っている現地 NGO（ウイスヌ財団）においてプロジェクトに関する公式・非公式会議、村でのプロジェクト、彼らの主催するツアーへの参与観察、彼らの作成した報告書収集を行った（メゾレベル）。③プロジェクトに関わっているバリ島南部バドゥン県の都市近郊のカパル村と農村部プラガ村の2つの村に長期滞在しながら、村落の社会的・文化状況に関する住民への聞き取り調査、慣習村機能の中心である儀礼への参与観察、村落が実施するコミュニティー・ツアーへの運営の参与観察と村を訪問する観光客への聞き取り調査などを行った（マイクロレベル）。

・研究内容

① マクロレベル

スハルト政権後の行政構造の再編により、県政府が州政府よりも強い権限を持ち、独自に予算を付け観光政策を行っていくことが出来るようになった。特に、コミュニティー・ツーリズムに関しては、県政府が独自にプログラムを持ち進めているプログラムである。調査地である、バドゥン県は、バリ島南部の一大観光地を抱え、マス・ツーリズムが最も進展した地域である。バドゥン県は、地理的には南北に長い形状を取っており、観光が発展した南部と中部・北部の地域的経済格差が地域政策の一大問題となっている。そのバドゥン県においては、この地域格差を是正するための一つ的手段として、2010年に県知事令で10の村がコミュニティー・ツーリズム促進政策の対象となり、プログラムが始まっている。さらに、2011年からは、県が村落観光促進のために、特別予算を付け、1000万円規模の行政事業として、プロジェクトを現在2つの村（そのうちの 하나가プラガ村）で実施している。

② メゾレベル

現地 NGO、ウイスヌ財団で参与観察を行った。具体的には、これまでの彼らの実施してきたプログラムやツアーについての聞き取り調査をし、現在行われているものに関しては彼らに同行することで、彼らがどのようにコミュニティー・ツーリズムを位置付け、村民に働きかけ活動を行っているかを参与観察を行った。ウイスヌ財団では、2002年に村落エコ・ツーリズム・ネットワーク（Jaringan Ekowisata Desa）を実施するためのプログラムを立ち上げ、その際5つの村が対象とされたが、報告書や会計の透明性の問題から、そのうちの一つの村はプログラムから離脱した。そして、2006年に正式にツアーとして発足し、観光客を受け入れるようになっている。現在では、4つの村で年間450名の観光客を主にヨーロッパ、オーストラリアから受け入れている。彼らは、村に対しては、ゴミの分別や収入を増加させるために竹の植林等を行い、コミュニティー・ツアーを運営する立場となる村民らに対しては、運営方法、ガイドのトレーニング、宿泊所のメンテナンスなどのアドバイスをを行っている。

③ ミクロレベル

ウイスヌ財団と県政府のコミュニティー・ツーリズム促進の対象となっている2つの村（カパル村とプラガ村）で、現代における村という共同体がいかなるものか明らかにするために、行政村の役割と慣習村を成立させている慣習法、組織、儀礼、既存の社会活動への住民の関与のあり方、そして行政村と慣習村の接点を把握したうえで、県とウイスヌの支援する村における新しい取り組みが「村」においては、実際、誰がどのように関与し、どのように実施されているかを調査した。カパル村は、ウイスヌ財団のプロジェクトには、2009年から参加したのは比較的新しい。他方、コーヒーの産地であるプラガ村は、2002年からウイスヌ財団のプロジェクトに関わっている。両村比較することで、都市と農村の社会・経済的状況の違いだけでなく、ウイスヌ財団と村との関係性の形成過程プロジェクトに関する運営の展開を通時的に観察できると考えた。

【結論・考察】

① マクロレベル

県に対する調査で明らかになったのは、政策の対象が村落であるものの地域がほぼ農村部に限定されていることである。県の打ち出しているコミュニティー・ツーリズム政策の背景には、バドゥン県南部の発展に対して置き去りにされる北部農村地域の地域格差問題がある。しかしながら、行政がコミュニティー・ツーリズムにかかわる場合、特にバリでは「村」というコミュニティーの問題が大きな影響を与える。というのも、先述したようにバリには「行政村」と「慣習村」の2つ村形態がある。県政府が関わるのは、このうち「行政村」である。しかしながら、本研究で明らかになったのは、村という共同体においてリーダーシップを発揮しているのは、「慣習村」のリーダーたちである。そして、行政がプログラムを行う場合、形式的な村民の参加はみられるが、そこに村民の意向が汲み取られることは殆どない。しかも、他の地域振興事業などの行政プログラムを受けられなくなるので、村民は不満を持ちつつもプログラムを受け入れるしかない状況にある。

② メゾレベル

ウィスヌ財団に対する調査で明らかになったのは、彼らはプロジェクトに際して彼らのネットワークを活用し、バリ在住の環境活動家、文化人、大学教員などに活動について彼ら自身も「バリの文化」をどのように理解し、プロジェクトを進めていくうえで取り入れるべきかアドバイスを求め、それを土台としてプログラムを進めていることである。他方、彼らは彼らに現在のバリ文化は危機的な状況であるという共通認識を持ち、本来の「バリの文化」とはいかなるものであり、バリ文化は今後いかなるべきであるかということプロジェクトを通して村人らに発信している。特に、プラガ村の人々はその語りと彼らの持っていたイメージを接合させて観光客に彼らの「村の文化」を語っている。

③ ミクロレベル

実際に村で行われている、ツアーの基本パターンは、観光客の数に合わせて村人が料理を準備し、英語を話すことができる村人がローカルガイドとなり寺院や農地を案内し、その後村の中でトレッキングを行われるというものである。報告者が調査を行った村では、ローカルガイドは流暢な英語で観光客を案内していた。というのも、両村ともに共通するのはコミュニティー・ツーリズムに関する人々は、以前何らかの形で観光セクターに関った経験を持つ人々が多かった。しかし、コミュニティー・ツーリズムに参加した動機は、カパル村では、村の人々の生活様式の変化や共同体への関与のあり方の変容に対する意識化、つまり村の内部の問題への目覚めが先行してあることに対し、プラガ村ではコミュニティーの問題はそれほど意識されず、ウィスヌ財団との関りの中で村を囲い込む問題、ごみや貧困問題が意識されていていく。カパル村のリーダーは、バリ島内外に広いネットワークを持ちウィスヌ財団のスタッフをある意味パートナーとして見ているが、プラガ村の人々は、ウィスヌ財団に対してアドバイスを求める立場にある。つまり、村人は、自らを自身の帰属する村については、一番の知識を持っていると自負しているが、「バリ」問題について語るとき、またそこに新しい概念が加わり語られるとき持ち合わせる知識の差によって、他のグループとの語りあいのあり方に相違が見られる。

これまでのバリ島観光に関する先行研究では、他者からのまなざしや、「観光」といった要素が、バリ社会に意識されることによって、「バリ文化」という一元的なアイデンティティーが編成されたということが示されてきた。しかしながら、本研究の調査と分析によって明らかになったのは、地方自治の時代である今日では、全体としての「バリ社会」の一体性の低下と並行して「慣習村」という共同体の再認識が進み、バリ社会内部では慣習村をひとつの帰属単位とした文化の差異化、それに伴う各々の「(慣習)村の文化」の独特性の主張という動きが強まっていることである。そして、観光の局面においては「バリ文化」は他者に向けて一体性は維持されつつも、その内部では「村」を主体する帰属意識の分散化というパラドクシカルな現象が起きていることである。「コミュニティー・ツーリズム」という観光形態は、バリ内部の社会的変容の負の側面と結びつくことに

よって、そして重要なことに「バリ文化」の持続を可能にする方法として、都市で教育を受けた観光のジレンマを認識し村に「バリ文化」のあるべき姿を求める知識人達を急速に引き付けている。バリにおけるコミュニティ・ツーリズムの展開は、これまでのマス・ツーリズムで意識されてきた「他者のまなざし」ではなく「内からのまなざし」のあり様に懸っているのである。

・留学の感想

この2年間の長期留学で、たくさんの出会いを経験し、研究者としても人間としても大きく成長することが出来たと思います。最初の一か月を除いてデンパサールに滞在した語学研修期間の5カ月、都市と農村の調査の18カ月に渡って3つのバリ人の家庭にホーム・ステイをさせてもらいながら研究を進めました。その意味で、日々の生活レベルで、私は常にバリの人々の生活に密着して、彼らの生活のあり方を日々そばで見つめながら研究生活を送ることが出来ました。

彼らの生活は、西洋のカレンダーではなく、太陰暦によるバリ独自の暦をもっていて、その暦に基づいて供物の準備が行われていたり、儀礼が行われたりと日常生活が営まれています。そして、冠婚葬祭、誰かの誕生日、家寺の儀礼など、村では何かしら毎日行われています。その時には、必ず声が掛かり、私は出かけて行くようにしていました。最初は、準備の整った儀礼のハイライトの部分に呼ばれるだけであったのですが、親しくなると、準備の段階から呼ばれ、供物の作り方を村のお母さんたちに教わるようになりました。そして、経験を積んで供物の準備が出来るようになると、作業を任せられるようになります。おしゃべりが好きな村のお母さん達は、手を動かしながら色々な話をし、その話にも加わり、最初は「日本人のお客さん」であったのが、距離がもっと近づき、年上の人からは「妹」、年下の人からは「姉」を意味する呼び名で話し掛けられるようになりました。村の友人たちは、インドネシアと日本の近さによるせいか、日本の文化や日本人の生活について私に様々な質問をしてきました。私は、正しい情報を伝えなければいけないと思い、自分の知識が足りない部分は調べてから伝える、ということをし続けました。それはバリにしながら日本について学び、バリの人々の日本観に直接触れる機会になりました。この留学期間で最も印象深かったのは、多くの村の友人に、普段生活していたら日本人とこんなにコミュニケーションを取ることはなかった、「ヒロイが来てくれてよかった」といわれたことです。もちろん留学期間中は、研究を進めるという葛藤の日々、体調を崩すことも少なからずありましたが、このように思ってもらえる付き合い方がバリの人々と出来て、そしてこれからも付き合いに行く人々に会えることが出来て、大変だった日々を忘れてしまうぐらい、振り返ると本当に充実した2年間で過ごすことができました。このような貴重な機会を与えて頂き、貴財団には大変感謝しております。これからも、このような素晴らしい留学スカラシップを続けていって下さるようお願いしております。

